

## 高橋秀

（平成三十年一月号）

「代わりなど幾らも居る」と九年前採用されし時に言われつ

上り来るエレベーターを待ちながら台車の乗せ方推し量り居り

A棟10階病棟の受付の人は大声で我が挨拶に応えてくれる

落ちそうな乳首の袋を積み直しNICUへ台車を押しゆく

器材載せた籠持つ足が滑りたり洗浄室の補修されし床

手術支援ロボットの腕を洗う洗浄機が設置されたり「サクラ」と呼ばれる

ライブから今朝戻りたる北君の数えた器材の数誤れり

「何だよ」と問えば「別に」と犬丸は言いつつ我を睨み続ける



### ●作者の言葉

東京歌会の二次会は「赤ひょうたん」という呑み屋で行われる。三年前、この「赤ひょうたん」で職場詠を勧め

られた。それ以来、病院の材料部の仕事を詠み続けているが、うんざりする事の多い業務なので、続けている意味があるのか不安になる。だが、

「赤ひょうたん」に行くと、毎回、佐佐木幸綱先生や先輩、仲間たちが励まして下さる。これまで職場詠を続けて来られたのも、二次会のお蔭だったように思う。もちろん、今回の年間賞も励みになります。佐佐木朋子先生、ありがとうございます。

### ●選者の言葉

高橋秀さんの短歌は、聞き知らぬ新しい言葉がおおく使われている。わたしが知らないだけで、彼の職場では基本語彙としてやりとりされる言葉のようだが。

しかし彼が短歌に詠まなければ、それらの言葉は職場という専門社会から一般社会へ出てゆくことはなかったろう。

それらは器具や機械に付けられた名前、仕事のシステムを示す言葉であることが多いが、作者の心象を表現するのに不可欠の存在となっている。作者の自己認識に直接関わってくる、格闘すべき相手のようだ。言葉で遊んでいるのではないらしい。

新しい職場詠とくくられるのは彼の本意ではないだろう。さまざまな試みで新しい自己を発見して欲しいと思う。